

第5回 新しい工業高校の整備候補地選定委員会 会議概要

- 1 日 時 平成25年11月29日 金曜日
開会 12時30分 閉会 14時00分
- 2 場 所 京都市総合教育センター 第3研修室
- 3 出席委員 松重和美 委員(座長), 岡野哲也 委員, 尾河清二 委員, 信部尚平 委員,
福本早苗 委員, 前野芳子 委員, 村上英明 委員, 室保次 委員
(オブザーバー) 恩田徹 洛陽工業高校校長, 西田秀行 伏見工業高校校長
- 4 傍 聴 者 12人
- 5 主な次第 (1) 前回会議の内容確認
(2) 「まとめ(案)」に関する事務局説明・協議
- 6 議事の概要
(1) 前回会議(第4回・11月6日開催)の内容確認
(2) 「まとめ(案)」に関する事務局説明・協議
ア 事務局説明
配布資料「まとめ(案)【概要版】」及び「まとめ(案)【本文】」により説明
イ 主な協議内容(は委員, はオブザーバー, は事務局)
本年2月に学校法人立命館から立命館中高の利活用についての照会があり, 本市が新しい工業高校の候補地として検討することとなった等の経過を追記してほしい。

阪神大震災, 東日本大震災と我が国は大きな自然災害が続いているが, その再建に向けては, 都市基盤の整備が最も必要とされる。伏見工業高校は都市基盤の整備や安心安全などの地域振興に貢献する人材を育成してきた。「新しい工業高校」は両校がそうである様に, 地域のまちづくりを支える次代を担う学校にしてほしい。

両校が築いてきた歴史と伝統をさらに充実・発展させる「教育の場」となることを念頭に数十年後の工業高校の在り方を意識し, これまで検討してきた旨を追記してほしい。

立命館中高において, 耐震性向上の必要性が示されているが, 公共の建物に求めら

れる自然災害時における緊急避難所としての役割などその必要性について具体的な説明を追記すべき。

公立の建物は一般の建物よりも高いIs値が求められる。御指摘のとおり、公立の建物に求められる最大限の配慮をすべきである旨を追記したい。

立命館中高の改修費で示されている23億円に耐震改修の費用は含まれているのか。改修工事費は、1平米あたりの単価と整備面積を用いて算出しているが、全体の改修費用の中に、耐震改修費用も入っている。

立命館中高の耐震性について、文部科学省の基準を満たしているのか。私立と公立は基準が違うはずである。

立命館中高は建築後25年を経過しているが、この間に改修を何度も行いながら運営されてきており、その点では安心いただけるのではないかと思う。

活断層について、「120m離れているから安全である」とも読み取れるため、「同じ伏見区にある立命館中高と伏見工業を比較しても、推定されるとされる活断層からの距離の差は200mもなく、また両校とも直上にはないことから、これをもって選定の優劣は決め難い。」などと誤解の生まないような修正をしてほしい。

立命館中高は、通学時において通学路の安全面の確保、地域との連携は必要となるが、工業高校は専門的な技術を教えるだけでなく、社会の発展や地域貢献に寄与する人材育成をする人間教育の場でもあり、緑が溢れる静謐な環境が確保されていることは教育を行う環境としては望ましいと考える。

伏見工業高同窓会としては、通学路や公共交通機関の利便性、擁壁の劣化や学校周辺に活断層が存在する可能性があるなどその安全性について強い懸念を持っている。

また、深草駅はバリアフリー化されていない。地域の学校として発展できるように、地域の方も安心して通行できる安心安全な通学路の確保が必要である。例えば、下校時に生徒が膨らんでお年寄りの邪魔になることなどが無いよう、地域と連携しながら安全面には最大限配慮をすべき。

最寄り駅から徒歩15分の通学は高校では一般的に許容とされる距離であり、坂を登るのはきついかもしれないが、卒業後はそれもいい思い出になるのではないか。

敷地面積や予算等の客観的な数値や物理的条件のみならず、「ものづくり」を支える学校づくりへの期待や将来性等も含め、総合的な判断のもとで議論を重ねてきた旨を追記してほしい。

今後、「新しい工業高校」は本市で唯一の工業高校となる。学校現場では、この高校に入ってよかったと生徒に喜んでもらえるような新しい学校にしていきたい。学校現場でもしっかり議論をしていきたい。

また、設備面の充実も不可欠であり、どれだけ最新の設備を投入できるかも非常に重要。ハード面・ソフト面の両輪がかみ合っこそ、教育の質の保障ができると思う。

前回の将来構想委員会から参加させていただいているが、「京都市の工業高校を入口（中学生・保護者）からも出口（大学・企業）からも選ばれる高校にする」という思いで臨んできた。また、今回改めて、高校設置義務のない本市が工業高校を持つ意義として日本初の工業高校のモデルを作っていくという志で取り組まないといけないと感じた。

また、立命館中高は、当時これまでのイメージを一新するため、現地への移転を決意されたと聞いたことがある。単に大学の附属校ではなく、SSH指定を受けるなど理系に重点を置いた深草校と文系・国際系の宇治校として戦略的に進めてこられた。理系の人材育成として一定の役割を果たし、次のステージに進むため、長岡京市に移転されると理解している。我々も移転するのであれば、京都の教育改革の起爆剤となるような学校にしていきたい。

施設面については、両校の工場や実習設備をそのまま持っていくのではなく、STEM教育や広い意味でのデザイン力・発想力を持った開発型の人材育成が可能な設備を整備すべきである。

（４）生田教育長挨拶

本委員会においては、松重座長をはじめ、同窓会、産業界、建築の専門家、公認会計士、行政・教育関係者に幅広く参画いただき、御多忙の中、皆様方には本年5月末に開催した第1回会議から約半年間にわたって、御出席いただいた。

その中で、皆様のこれまでの経験や専門性を活かし、3つの候補地の施設状況等の諸条件について、多角的な視点から貴重なご意見を賜り、忌憚のない積極的な議論を積み重ね、洛陽・伏見両工業高校の歴史的な再編により創設する「新しい工業高校」に相応しい候補地について、本委員会としての「まとめ」を御提出いただく段階にまでご尽力いただき感謝申し上げます。

洛陽工業は明治19年に全国初の公立工業校として創設、伏見工業は大正9年に創設以来、一貫して、京都はもとより日本の産業界を支える確かな技術力と豊かな人間性を備えた有為な人材を輩出してきた。またそれぞれ長きに亘り、生徒や教職員が築き上げてきた歴史や伝統を有し、素晴らしい「ものづくり」教育が実践されてきた。

今後、提出いただく予定であるこの「まとめ」を踏まえ、教育委員会として、責任を持って候補地を最終決定し、魅力的な「ものづくり」教育を推進し、将来、我が国

の「ものづくり」産業を担う人材を育成する「新しい工業高校」創設に向け、スピード感を持って進めてまいりたい。

また来年度から実施される公立高校の新しい入試制度の下、各高校がさらに特色ある取組を推進する中、魅力溢れる工業高校づくりが求められる。

「ものづくり」を通じ、社会の発展と平和に寄与する「豊かな人間性」を育むとともに、工業教育という視点に止まることなく、生徒の多様なニーズ・興味関心に応え、「学び」への意欲を高め、将来の夢に向かってチャレンジすることができる、今後の高校教育のあるべき姿を追求する広い視野に立った「新しい工業高校」づくりの実現に向け、委員の皆様には、今後とも、本市教育に御指導・御支援を賜りますようお願い申し上げます。

(5) 今後の進め方について(座長)

本日の協議で踏まえ、「まとめ(案)」を座長と事務局で修正後、各委員へ確認する。年内を目途に、本委員会としての「まとめ」を教育長に提出する。

(6) 閉会

14時00分、座長が閉会を宣告。